

IUHW



国際の集い アジア各国料理の屋台にて

特集1 新春のごあいさつ

特集2 「国際の集い」開催

高校生作文コンテスト表彰式



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

国際医療福祉大学・高邦会グループ理事長 高木 邦格

アジアトップの 医療福祉の総合大学 をめざして



2024年を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げますとともに、このたびの令和6年能登半島地震により被災された皆様ならびにそのご家族の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。皆様の安全と被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

本学では各県の要請を受け、1月6日より順次、国際医療福祉大学塩谷病院、国際医療福祉大学成田病院、国際医療福祉大学熱海病院から災害派遣医療チームDMATを石川県に派遣し、被災地の医療支援を行いました。今後も引き続き、本学の建学の精神である『共に生きる社会』の実現に基づき、被災地の復興に医療を通じて協力してまいります。

本年で創立29年となる本学は、日本初の医療福祉の総合大学として栃木県大田原市に開学いたしました。現在では、医療福祉分野のほぼすべての学びの領域をカバーする学部・学科を展開し、大田原、成田、東京赤坂、小田原、大川の5つのキャンパスに大学院生を含め約10,000人の学生が学んでいます。これまでに輩出した約32,000人におよぶ卒業生は、各専門分野で地域の医療福祉に貢献しているほか、国際的にも幅広く活躍し、国内外で高い評価をいただいております。本学はこれからもアジアを代表する国際的な医療福祉の総合大学として、日本およびアジアの医療福祉分野の発展と医療福祉専門職の育成に貢献できるよう一層努力してまいります。

2017年に開設した医学部は昨年無事完成年次を迎え、3月には一期生が成田キャンパスを巣立っていきました。一期生の医師国家試験合格率は99.2%(全国第2位)で、日本の医学部では本学が受け入れ最多となっている留学生についても、受験した15人全員が合格を果たしました。「国際的な医学部」の基礎固めという医学部開設以来の1つの目標は達成できましたが、今後はアジアトップの医学部となることをめざし、本学教職員一丸となってさらに充実した教育環境を実現してまいりたいと思います。

幅広く展開する国際交流活動

コロナ禍で中断していた国際交流活動についても、昨年はいよいよ再開することができました。医学部6年生全員を対象とした海外臨床実習は、一昨年はベトナムを中心とした限定的な実習先にとどまっていたものの、昨年はアジア・欧米の18か国・地域の大学医学部・医療機関で行われました。また、本学の正規授業科目である海外保健福祉事情については、14か国・地域、25の医療機関で実施することができました。

3月には「第2回IUHW国際医学教育シンポジウム」を東京赤坂キャンパスで開催しました。医学部一期生卒業記念祝賀会の翌日に行われた本シンポジウムでは、本学の医学部に

ける6年間の医学教育を振り返るとともに、本学と学術交流協定や医療協力協定を結ぶアジア各国の医科大学学長や病院長にご登壇いただき、各国の医学教育の現況をご報告いただきました。パネルディスカッションでは、将来のアジアを担う医療者教育の展望について活発な議論が交わされました。

7月には、鈴木康裕学長とともにブータンとタイを訪問し、ブータン王立公務員委員会と本学医学部奨学生受け入れのためのMOUを締結し、医学部への2人の留学生の受け入れが決定しました。ブータン王立医科大学との学術協定も締結したほか、タイでは、国立マヒドン大学との学術協定を締結しました。

そして9月には、ベトナムホーチミン市にて、「日越外交関係樹立50周年記念国際医療協力シンポジウム」を開催しました。日越両国の政府関係者や専門家をはじめとする400人が参加し、日本とベトナムを中心とするアジア全体の医療水準の向上をテーマに白熱した議論が繰り広げられました。さらに本学は日越外交関係樹立50周年を記念し、医療福祉施設で2週間の研修を行う特別プログラムを用意し、医師、看護師、リハビリテーション職、学生など医療関係者50人を日本に招待することを決定しました。ベトナムの今後を担う医療職の方々がこの特別プログラムで学び、将来の日越の医療分野の架け橋となることを期待されます。

12月には、日本・東南アジア諸国連合(ASEAN)特別首脳会談出席のため訪日中のファム・ミン・チン・ベトナム首相と会談しました。チン首相は、本学のベトナムの医療分野における人材育成への取り組みに謝意を表したほか、本学がベトナムに建設を計画している日越友好病院に関しても、ベトナムでは日本の医療への高いニーズがあるため、今後人材面で協力して円滑な運営を支援すると同時に、高度な人材の育成ができるように協力したいと話しました。

本年は昨年以上に幅広く国際交流活動を展開する予定です。少子高齢化が進みゆく日本の将来を見据え、本学は地域医療への貢献と同時に、引き続き海外へも視野を広げてまいります。

創立30周年に向け飛躍の年に

本学では、医療福祉分野における社会のニーズに応え、地域の医療福祉に貢献するべく、本年も新たに学部や学科を開設する予定です。4月には、成田キャンパスに成田薬学部を開設するほか、大学院においても公衆衛生専門職大学院を開設いたします。また、姉妹校の福岡国際医療福祉大学医療学部には診療放射線学科も開設いたします。

さらに、医学部本院としての国際医療福祉大学成田病院の機能を充実させ、アジアを代表する医療福祉の総合大学として、医療福祉の発展と医療福祉専門職の育成をはじめ、研究機能の強化も図ってまいります。また、2025年の創立30周年の節目に向けて、さまざまなプロジェクトを企画し、教職員一丸となって取り組んでまいりますのでよりよくお願い申し上げます。

新しい1年が皆様方にとってさらなる飛躍の年となりますよう祈念し、私のご挨拶とさせていただきます。

国際医療福祉大学学長 鈴木 康裕

2024年の新春を迎え、皆様に一言ご挨拶を申し上げます。

まず、元日に発生しました能登半島地震により亡くなられた方々に謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災された多くの皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

さて、昨年は本学の5つのキャンパスにも、コロナ禍以前の大学らしい日常が少しずつ戻ってまいりました。一昨までは中止や制約があるなかでの開催を余儀なくされた大学祭や運動会、オープンキャンパスなども、昨年は感染症対策に万全を期しながら、コロナ禍以前と同様に開催することができました。

11月に東京赤坂キャンパスにて開催した「国際の集い〜東京赤坂キャンパスでつなぐ国際交流の輪〜」も、昨年行われた対外的な大型イベントの1つです。港区や地元町内会をはじめとする地域の方々や、本学に留学生を送り出している国々の大使館関係者をお招きし、アジアの留学生による日本語スピーチコンテストや各国の伝統舞踏をはじめ、各国料理を振る舞う屋台、東京赤坂キャンパスの学生によるお祭り屋台、日本の伝統文化を紡ぐ琴・尺八の演奏や舞など、バラエティに富んだ催しを行いました。約230人の皆様にご参加いただき、



国際医療福祉大学大学院長 矢富 裕

新たな年の初めを迎え、皆様に謹んで新春のご挨拶を申し上げますとともに、令和6年能登半島地震により被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

昨年は5月に新型コロナウイルス感染症の分類が5類感染症に変更され、本来のキャンパスに戻りつつある一年でした。今年は、ポストコロナの新たな歩みがキャンパスで展開されることを願うものです。

本学は医療福祉の総合大学として、1995年に開学し、1999年に大学院が開設されました。その後、順調に発展し、いよいよ来年2025年には開学30周年を迎えます。私は昨年4月の着任後、短い期間ですが、全国のキャンパス、関連施設などを訪問しましたが、共生社会の実現という建学の精神の下、本学がその特色を生かして発展していることを実感しています。これまで本学の発展に関与された教職員の方々や関係者に心より敬意を表するとともに、今後、私自身も努力し



笑顔があふれる、心温まるイベントとすることができました。イベント全体を通して、日頃よりお世話になっている皆様への感謝の気持ちをお伝えできたと同時に、本学が基本理念に掲げ、教育理念にもうたう「国際性」をカジュアルな形で楽しんでいただくことができました。本年もまたこうした交流イベントをはじめとする機会を通じて、地域の皆様と連携を図ってまいります。

また、昨年は海外臨床実習や海外保健福祉事情も、一昨年以上に幅広い国と地域で実施することができました。本学医学部のディプロマポリシーに「医療の国際化に対応した幅広い知識と高いコミュニケーション能力を持ち、海外の医療現場で活躍できる」とある通り、海外での実習や研修はグローバルに医療に貢献することが求められる本学の学生には欠かせません。昨年の医学部二期生の海外臨床実習は世界18の国と地域における大学医学部・医療機関で行われ、一昨年海外臨床実習に参加した一期生に比べて制限の少ないなかでより幅広い海外経験を得ることができました。一方、本学の正規授業科目として歴史のある海外保健福祉事情においても、コロナ禍以前の規模となる多くの国と地域の医療機関で実施され、各キャンパスの学生総勢757人が参加し、各国の医療福祉事情を学びました。

2024年は、成田キャンパス薬学部、公衆衛生専門職大学院、福岡国際医療福祉大学医療学部診療放射線学科が新たに開設され、より一層多様な学びを得る環境が充実いたします。医療福祉の総合大学として、高い専門性と豊かな人間性、そして国際的素養をもつプロフェッショナルの育成に貢献してまいります。

本年も教職員一同精一杯努力してまいります。一層のご支援ご鞭撻をよりよくお願いいたします。

ていきたいと考えておりますので、何卒よろしくご挨拶申し上げます。

新たな高度情報化社会Society5.0が提唱されていますが、実際のところ、凄まじいといつてよい科学技術の発展とデジタルトランスフォーメーションの進化、国内外の社会情勢の変化、地球環境の変化などにより、やはり、世の中全体の変化も凄まじく、なかなか予測不可能な時代・世界になっています。従来の考え・概念に固執することなく、大きな変化に対応でき、新しい発想を取り入れていく姿勢・能力が必要になります。そして、このような不確実な時代に対応できる知のプロフェッショナルを生み出す教育ニーズ、そして、学び続けることができる教育機会提供の重要性は益々高まっています。多種多様で柔軟な教育、そして、生涯学び続けられる教育環境を提供している本学の存在価値はさらに高まっていると言えます。

「共に生きる社会」の実現という建学の精神、そして、3つの基本理念「人間中心の大学」、「社会に開かれた大学」、「国際性を目指した大学」という、いわば、本学の基本・初心を忘れず、しかし、大きく変わる時代に遅れず、本学の発展を継続させることが必要であり、私も、全力を尽くしたいと考えています。ぜひ、今後とも皆さまのご支援・ご協力をよりよくお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様にとってよりよい一年になりますよう心よりお祈り申し上げます。私の年頭のご挨拶とさせていただきます。本年も何卒よろしくご挨拶申し上げます。

～東京赤坂キャンパスでつなぐ国際交流の輪～ 「国際の集い」開催

アジアからの留学生らによるさまざまなイベントを通じて、地域の方々と交流を深める「国際の集い」が11月18日、東京赤坂キャンパスで開かれた。各国の民族舞踊や日本の伝統芸能、アジアフード屋台、日本語スピーチコンテストなど盛りだくさんの催しが行われ、地元赤坂の行政・町内会関係者や留学生の出身国であるアジアの大使館関係者ら約230人が楽しいひとときを過ごした。



●日本語スピーチコンテスト参加者で記念撮影

地元行政・町会関係者や大使館関係者 230人が参加

講堂で開かれた日本語スピーチコンテストには、本学成田キャンパスを中心に医学や医学検査、介護福祉などを学ぶ大学生ら7か国の10人が参加。異国の地で言葉や文化、学業などで壁にぶつかりながらも、自身の努力と周囲の支えによって適応していく様子などが、さまざまな切り口で語られた。審査委員長の鈴木康裕学長は「私たちが英語でスピーチをしながらも、皆さんのようにはできない、本当に素晴らしい内容でした」とたたえた。

審査の結果、日本語をまちがってもほめてくれる日本人とのやりとりから互いを思いやる気遣いの心を知り、日本での生活を楽しめるようになったこ



●インドネシアの屋台



●モンゴルの屋台

とをユーモラスに語ったミャンマーのウイン ソウ モエさん(医学部医学科2年)が1位の金賞に輝いた。

昼食はカフェテリアが開放され、ピュッフェ形式の和洋食のほか、アジア各国の郷土料理を留学生が調理・提供する屋台が並んだほか、日本の縁日のにぎわいを演出しようと、赤坂心理・医療福祉マネジメント学部の学生によるヨーヨー釣りや輪投げなどのお祭り屋台も人気を集めた。

『「国際性」をカジュアルな形で楽しんで』 鈴木学長

午後の部冒頭、今回のイベント開催について挨拶した鈴木学長は、東京赤坂キャンパスが立地する港区には、赤坂心理・医療福祉マネジメント学部の学生や大学院生のほか、国際医療福祉大学三田病院、山王病院などグループ全体で約2,800人の在勤・在学者がいることを説明。「本日は、本学が基本理念に掲げ、教育理念にもうたう『国際性』をカジュアルな形で楽しんでほしい」と呼びかけた。

来賓として訪れたバンズラグチ バヤルサイハン駐日モンゴル国特命全権大使は、「国際医療福祉大学がモンゴルの医療福祉分野の向上に多大な貢献をしていることに感謝します。留学生の皆さん、これからがんばってください」と挨拶した。ソー ハン駐日ミャンマー連邦共和国特命全権大使は「国際

の集いは文化の相互理解につながり、国際医療福祉大学の理念にかなうものです。日本語スピーチコンテストで入賞した3人のミャンマー人学生を祝福しつつ、今後の留学生の活躍を祈っています」と述べた。

また、今年7月にブータンの王立公務員委員会と本学医学部への奨学生受け入れのためのMOUを締結したことを踏まえ、来年4月に入学するため来日して日本語の勉強を始めている2人の留学生も紹介された。

午後のメインとなったパフォーマンスには、モンゴル、インドネシア、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムの6か国の留学生が参加。それぞれの国の名所などを映像や音楽で紹介しながら、民族衣装を身にまとった学生がグループで踊りなどを披露すると、講堂は祝祭的な雰囲気包まれた。最後は、日本の伝統芸能である琴や尺八による演奏、日本舞踊が披露され、5時間におよんだ催しは盛況のうちに幕を閉じた。



●挨拶するバンズラグチー バヤルサイハン駐日モンゴル国特命全権大使



●挨拶するソー ハン駐日ミャンマー連邦共和国特命全権大使



●ブータンからの留学生



●モンゴル人留学生エンフトヤ バットインフさん(医学部5年生)



●モンゴルの留学生によるパフォーマンス



●インドネシアの留学生によるパフォーマンス



●ダンスパフォーマンスを披露するカンボジアの留学生



●伝統的な踊りを披露するラオスの留学生



●歌と踊りを披露するミャンマーの留学生



●ベトナムの留学生によるパフォーマンス



●琴、尺八、十七弦の演奏



●ステージ最後の演目となった日本舞踊

令和6年能登半島地震被災地へDMAT派遣

令和6年能登半島地震で被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げますとともに、被災地域の一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

2024年1月1日に発生した令和6年能登半島地震による被災地の支援のため、本学附属病院からDMAT（災害派遣医療チーム）を派遣した。

国際医療福祉大学塩谷病院では1月6日～8日、栃木県からの要請に応え、医師1人と看護師2人、業務調整員として、作業療法士1人と臨床検査技師1人の5人で構成されたDMATを第1班として派遣した。1月6日、石川県七尾市の能登総合病院内に設置されている能登医療圏活動拠点本部に到着。輪島市への派遣指示を受け、同日夕刻輪島市に入り、翌7日より輪島市保健医療福祉調整本部にて、医師・看護師は市内福祉施設の被災状況の調査を行うとともに、医療・物資ニーズの聞き取りと手配などの業務を統括した。業務調整員は、本部業務全般の支援活動を行った。その後、第2班と



●転院搬送の準備を行う熱海病院DMAT

して、同じく塩谷病院より、DMATロジスティックチーム隊員の派遣要請を受け、1月15日～19日の5日間、放射線技師1人を追加派遣した。

国際医療福祉大学塩谷病院に続き、国際医療福祉大学熱海病院からも、1月12日～15日（12日、15日は移動日）、医師1人、看護師2人、放射線技師（業務調整員）1人の4人を派遣した。また、国際医療福祉大学成田病院からも、1月11日～15日、医師1人、看護師2人、業務調整員として、放射線技師1人と事務1人の5人を派遣した。

また、本学大学院生も、災害医療分野の博士課程3人、修士課程5人の合計8人が被災地に赴き、支援活動を行った。

トルコ・シリア地震 国際緊急援助隊・医療チームとして派遣された内海講師にJICAより感謝状

昨年2月6日、トルコ共和国の南東部カラマンマラシュ県付近を震源とするマグニチュード7.8の地震によって甚大な被害が生じた。日本政府はトルコ共和国政府からの要請を受け、同10日から国際緊急援助隊（救助・医療・専門家チーム）を派遣した。国際緊急援助隊の医療チームは、南東部ガジアンテップに設置した野外病院で診療活動を実施。延べ約180人が派遣され、総数で約2,000人の診療を行った。（※）

医療チームの二次隊メンバーとして参加した本学大学院の内海清乃講師に、10月6日、JICAより感謝状が送られ、矢富裕大学院長より表彰された。

※出典：JICAホームページ<https://www.jica.go.jp/information/jdrt/2022/230316.html>

内海講師の現地レポート

私は二次隊メンバーとして2月24日から3月9日まで派遣され、外来・病棟で患者対応を行いました。また、災害医療分野の博士課程在学者2人（うち1人は修士修了生）、修士課程在学者4人も一次隊から二次隊の医療チームメンバーとして派遣され、分野としても全面的に支援活動に参画しました。国際緊急援助隊医療チームの診療サイトには、地震以降避難所生活をしている方だけでなく、ガジアンテップ唯一の総合病

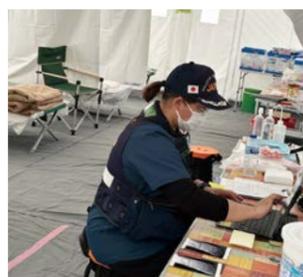
院が被災したために診療が受けられなくなっていた慢性疾患の患者等も多く受診していました。

今回の派遣では、現地の文化・慣習を踏まえようとして被災された方が本当に必要としている支援は何かということを考え、よく観察し実践するという意識を持って活動してきました。大学院の講義で災害医療の原理原則として相手の望む支援を提供すること、人の尊厳を守ることの重要性を伝えていますが、改めてそのような視点の重要性を実感しました。また、被災地内の大学病院には210例のクラッシュ症候群（うち52例が小児）が搬送され、緊急透析が施行されたと報告されています。日本の医療チームの活動だけでなく、これから災害対応の知見を生かすために、今後も災害医療分野で研究・人材育成に取り組んでいきたいと考えております。さらに、今回の派遣は東京赤坂キャンパスの大学院事務局・人事部に全面的に協力をいただきました。大学院のご支援にも感謝いたします。

最後になりましたが、被災された皆様にお見舞い申し上げますとともに、未だ避難生活を余儀なくされている方々が一日も早く平穏な日常を取り戻されることを願っております。



●矢富大学院長と内海講師



●病棟での業務風景（写真提供：JICA）



●東京シティエターナルで行われた結団式（写真提供：JICA）

医療福祉・マネジメント学科教員が大田原高校生の研究発表に助言

文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されている栃木県立大田原高校の生徒と引率教員が10月31日、本学に来訪、医療福祉・マネジメント学科の教員らが同高の予定している課題研究発表会に向けた助言を行った。

SSHは先進的な理数教育を進め、高校と大学の共同研究や国際性を育むための取り組みを行っており、栃木県内では同高を含め2校のみが指定されている。今回の助言もその課題研究発表会に向けた準備の一環。当日は生徒たちが作ったポスター発表をめぐって山本康弘医療福祉学部長のほか、医療福祉・マネジメント学科の江田哲也准教授、坂本幸平助教ら教員に学生数人が加わり、熱心に質疑が行われた。

山本学部長がSSHの運営指導委員長を拝命していることもあり、同高の成果発表への助言を3年前から行ってきた。毎年3月の研究計画審査会では、学科教員6人が審査員として生徒の発表を審査し、また、それに先立つ2月のプレ審査会では、学生・院生10人も加わって助言を行っている。

これらの取り組みが同高生徒の課題研究に対する深化・充実につながっていくことを期待したい。
（医療福祉・マネジメント学科 山本康弘、江田哲也）



●大田原高校生たちに助言する様子

2023年度後期 防災訓練

小田原キャンパスでは、12月12日に2年生を対象に大規模地震を想定した防災訓練が行われ、学生と教職員の合計215人が参加した。

本年度の訓練は、3学科の2年生が一堂に会する本学舎で、関連職連携論の授業中に震度6弱の大地震が発生するという、これまでにない想定での実施となった。

2限目の授業が終盤にさしかかるころ、地震発生のアナウンスが館内に流れ、避難命令が出されると、学科ごとに設けられた避難場所に一斉に移動。避難場所では、学生の防災

委員が先頭に立ち、点呼による所在確認までの一連の流れを体験した。

その後、本学大学院の内海清乃講師によるミニ講義が行われ、訓練の講評を受け、将来医療職として現場に従事した際の災害時における必要な対処法を学んだ。

授業後には、キャンパスで備蓄している災害用の食料品や防災用品にも触れ、学生一人ひとりが災害に対する意識を高める貴重な機会となった。
（総務課 下村達典）



●階段を使い学科ごとの避難場所へ移動



●内海清乃先生によるミニ講義の様子



●備蓄食品と防災用品を確認

今中助手の研究論文、協会誌の学術奨励賞を受賞

国際医療福祉大学視機能療法学科の助手の今中楓菜さんの研究論文「歩行中の視力を評価するための新しい検査法の構築」が、日本視能訓練士協会誌の学術奨励賞を受賞、11月18日、19日に香川県で開催された第64回日本視能矯正学会で授与された。

これまで動体視力を評価する方法はあったが、実際の歩行時の視力を評価する方法はなかった。今中助手の研究はこれを可能にし、実際の歩行中の視力を定量評価する方法を確立した。また、視覚の観点から、高齢者の転倒・転落予防と健康寿命の延伸に対する寄与と、視能訓練士、眼科医、理学療法士の多職種連携による学際的研究の成果が評価された。

今中助手は現在、本学大学院博士課程で、高齢者の歩行視力に関連する要因の分析に取り組んでおり、研究のさらなる深化と発展が期待されている。

（視機能療法学科 岡野真弓）



●日本視能矯正学会で学術奨励賞を受賞した今中助手

大田原キャンパス

学生ら250株植樹 国道461号がラベンダーロードに

大田原キャンパス南門前を走る国道461号の中央分離帯に、薬学部のメンバーが中心となって進めてきたラベンダーの植樹が進み、このほど今年度分250株の植樹が完了した。植樹にあたったのは今年度、サークルから部に昇格した「PCCラボ」(Pharmacognosy Club=生薬学クラブ)の3年生を中心とする20人以上の学生たち。当初、雑草が伸び放題になっている国道の中央分離帯に目を付け、ラベンダーの植樹を思いつき、整備した。

とはいえ実現までには曲折があった。もともとは、薬草園の落ち葉や雑草から堆肥を作り野菜を栽培しようとしたが、キャンパス内には場所がなく、目を付けたのがこの中央分離帯。しかし、大田原市役所に相談したところ野菜栽培は国道であるため、土木事務所からの許可が得られないということで断念。道路の見晴らしを阻害しないラベンダー植樹が決まったのは昨年3月だった。

将来的には数千株の植樹を、と考えており、正式に「ラベンダーロード」と命名して新たな大田原の名所に、とボランティアメンバーは張り切っている。(薬学科 藤井幹雄)



●最初に植えたラベンダーは花をつけよい香りを放っている

●植樹に参加した(左から)5年生の田尻さん、3年の内山、梨本、古川、佐藤、柁元さん、5年の金子さん



「第20回学生&企業研究発表会」薬学部学生 金賞受賞

「第20回学生&企業研究発表会(大学コンソーシアムとちぎ主催)」が開催され、本学薬学部から2グループが参加し、大阿久礼人さん他4人のグループが「母体環境が子の精神発達に及ぼす影響と漢方薬の治療可能性」のテーマで発表し、金賞を受賞した。

本発表会は、栃木県内の大学や企業が一堂に集まり、「地域社会貢献」「地域人材育成」「環境エネルギー」「ものづくり」「医学・医療・福祉」の5つの分野で、学生が主体となって行った日ごろの活動内容を発表しあうユニークなイベント。分野別発表会が11月17日~24日に動画視聴形式で行

れ、各分野から選考された10グループが、12月2日の最優秀賞選考会(宇都宮大学 陽東キャンパス)で発表を行った。

なお、林奏子さん、橋本時子さん他1人の発表「大田原市のような明暗環境は生体リズムに作用し体の調子を整える」は、企業賞である「烏山信用金庫理事長賞」を受賞した。

(総務課 深澤望)



●代表の大阿久礼人さんの発表

成田キャンパス

2023年度 国際医療福祉大学 合同慰霊祭及びご遺骨返還式

「2023年度国際医療福祉大学合同慰霊祭及びご遺骨返還式」が11月4日、成田キャンパスで、ご遺族、教職員、学生などの参列のもと挙行された。

ご遺体は死後、自分の遺体を医学生たちの解剖学実習のために提供することを生前に事前登録し、亡くなった後にご遺族から医学部にご遺体が提供される。学生は解剖実習を通して医療従事者として学び、成長することから、医療従事者と患者様との信頼関係の原点といわれる。

合同慰霊祭ではご遺族、教職員、学生など約250人の参加者全員で医学教育、研究のためにご遺体された方々に黙とうを捧げた。続いて、鈴木康裕学長が追悼のこたば、坂元亨宇医学部長がお礼のこたば、医学部3年生学生代表が感謝のこたばを述べた。そして、参加者全員が一人ひとり祭壇に献花した。

合同慰霊祭に引き続きご遺骨返還式が行われ、献体の会代表を務める坂元医学部長からご遺族にご遺骨を返還。解剖学の小阪淳教授の挨拶で閉会した。(広報 城貴弘)



●参加者による献花

小田原キャンパス

「第18回運動会」を開催

小田原キャンパスでは、11月25日に第18回運動会を開催した。

今回は、新型コロナウイルス感染症が第5類に移行したことにより、4年ぶりの全日開催となった。昨年は雨天により午前中に1種目のみの開催だったため、今年こそは思いきり楽しめる1日になるよう、実行委員の学生たちが夏休みから準備を進めてきた。

学科・学年の壁を越えて交流を深めようと、学科学年混合の4チームに分かれて競い合った。午前中はバレーボール、ボール渡しゲーム、午後はジェスチャーゲームとドッジボ

ール、リレーが行われ、応援する学生たちから大きな歓声が上がっていた。

昼の休憩時には軽食としてパンと紙パックジュースが参加者に配布され、食堂や中庭では談笑しながら食べる学生の姿が多く見られた。

閉会式では実行委員から優勝・準優勝のチームに賞状を、MVPに選ばれた学生には賞品が手渡された。学科・学年の分け隔てなく、学生たちがお互いに協力・応援しあいながら笑顔で取り組んでいる姿が印象的だった。来年以降も先輩の実践を後輩たちが引き継ぎ、さらに盛り上がった運動会が開催されると期待されている。(学務課 千葉楓)



●バレーボールの試合



●ボール渡しゲームの様子



●色別対抗リレー



●閉会式での表彰

大川キャンパス

高校生対象に「薬学プレミアムカレッジ」を開催

福岡薬学部では、大学ならではの実験や研究の面白さを知ってもらおうと10月21日、高校1、2年生を対象にした「薬学プレミアムカレッジ」を開催した。最先端の研究に携わる教授陣の指導の下、参加した高校1、2年生15人が生物系、薬理系、物理系の3つの班に分かれ、実験・研究の楽しさに触れる1日を満喫した。

実験に先立ち、武田弘志学部長が、チーム医療や臨床の場で活躍する「臨床に強い薬剤師」に不可欠な「根拠に基づく医療(EBM)」の重要性、リサーチマインドを育む福岡薬学部の教育や特長について説明。その後は最先端の研究教育に携わる教授陣指導の下、生物系では「PCR法によるゲノムDNAの増幅とアガロース電気泳動による解析」、薬理系では「蛍光でみる細胞の機能と薬の作用」、物理系では「解熱鎮痛剤の成分の定量分析をやってみよう」にチャレンジした。

大学の先端機器を使った実験に、参加した生徒からは「難しいテーマだったけれど、楽しく実験できた」「頭で学んでいただけの知識のずっと先にある、奥深い世界に触れることができた」「高校では触れることができない器具を使った実験にわくわくした」といった感想が寄せられた。

(広報 帆足リエ)



●熱心に実験に参加する高校生たち

東京赤坂キャンパス

「4年生による就活体験報告会」を実施

東京赤坂キャンパスでは毎年、就職支援の一環として「4年生による就活体験報告会」を実施している。今年度は12月20日の13:00~14:30、1時間半にわたり講堂にて行った。

各学科4年生の代表4人が就職活動の流れや自身の失敗談をはじめ、インターンシップの参加、スケジュール管理、勉強方法、面接対策、就活に役立つオススメツールなど、就活を経て得た情報や体験談を発表した。先輩方の臨場感あふれる体験談に、集まった後輩たちは熱心に聞き入っていた。質疑応答では参加者から「面接で聞かれたこと」「資格試験と就活の両立」「不安の解消方法」についての質問が次々に出るなど、貴重な就職支援の機会となった。

就職活動を行ううえで、先輩方の「リアルな体験談」はこれから本番に挑む学生にとって一番の情報源となる。当日は2年生も参加し、早い時期から「就活モードに切り替える」ことが大切という先輩方からの説明に耳を傾けていた。

登壇した4人も「自身の経験が少しでも後輩たちの参考になれば」と体験談の発表を快諾してくれた。4年生の成長した姿も見られた就職体験報告会となった。

(事務課 野原大彰)



●就活での体験談を語った4人の4年生

国際医療福祉大学成田病院

病院長 吉野 一郎

九州大学卒、医学博士。前千葉大学大学院医学研究部呼吸器病態外科学教授、同大医学部附属病院副病院長。日本呼吸器外科学会理事長・第35回学術集會会長、日本肺癌学会常任理事・第64回学術集會会長、アメリカ外科学会(ACS)・アメリカ胸外科学会(AATS)・ヨーロッパ胸外科学会(ESTS)正会員。



新年早々の能登半島地震と航空機事故で被災された方々に、心よりお見舞いとお悔やみを申し上げます。空港至近の災害拠点病院として、地域の健康と命を守る大学病院として、使命と責任を改めて認識した次第です。

昨年5月に5類へ移行したCOVID-19ですが、入院治療が必要な高齢者はこれまでと同様に存在し、8~9月には病棟クラスターも発生するなどの経験を踏まえ、当院では地域の定点観測数に沿ってステップ方式で対応してまいりました。10月には病院機能評価を受審し、12月の中間結果では88項目中・11項目(12.5%)がC評価でしたが、S・A評価が78%とまずまずの評価でした。引き続き、C評価項目の是正を行いつつ特定機能病院の承認に向けて、さらに意欲的に機能向上に取り組む所存です。

当院の昨年の診療実績は救急車約500台/月、手術550件超/月と過去最多を更新し、1日平均の入院・外来数もそれぞれ約350人/1,100人と漸増傾向が続いておりました。手術や外来予約をお待ちいただいている方々への対応も念頭に、職員一同、心を一つに力を合わせて前進していきたいと存じますので、本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学市川病院

病院長 大谷 俊郎

慶應義塾大学卒、医学博士。慶應義塾大学名誉教授・前医学部整形外科教授・医学部スポーツ医学総合センター教授・看護医療学部教授。日本整形外科学会認定整形外科専門医・スポーツ医・脊椎脊髄病医、The Best Doctors in Japan(2018~2020)。



昨年は5月に新型コロナウイルス感染症が5類に変更され、社会にはポストコロナという言葉が踊り、実際にインバウンドなど多くの社会現象がコロナ前に近づいた1年でした。その一方で、医療施設では感染予防を怠ることができず、社会の風潮とのギャップに悩まされた1年でもありました。

そんな中で、当院は全職員の献身的な協力により、通常診療の継続に尽力してまいりました。4月にはこれまで非常勤医師の外来対応でしのいできた泌尿器科に待望の常勤医師が赴任し、これまでできなかったさまざまな泌尿器科手術への対応が可能となりました。また、学生教育においても、学内外からの学生実習に対応してまいりました。

2024年は、医療の世界でも働き方改革が始動します。感染症の動向も気になるころではありますが、当院は本年も地域の皆様が安心してかかれる病院、また職員にとって働きやすくやがいのある病院でありたいとの思いで、さらに前進してまいります。

本年もよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学病院

病院長 鈴木 裕

東京慈恵会医科大学卒、医学博士。第25回PEG・在宅医療学会学術集會会長。日本外科学会認定指導医、日本消化器外科学会認定消化器外科専門医、日本消化器内視鏡学会認定指導医などの資格を有し、胸腔鏡手術においては消化器系がんの入院期間を短縮させ、患者様の早期社会復帰に尽力する。



2020年の春ごろから未曾有のコロナパンデミックに襲われ、医療をはじめとするあらゆる領域で通常と異なる対応を強いられました。そのコロナの大きな波もようやく収まりつつありますが、今われわれ医療者に求められているのは、コロナで学んだ経験を生かし、医療にイノベーションをもたらすことではないでしょうか。遠隔医療の導入および多職種連携などは、明らかにコロナが契機となり発展の動機付けになりました。

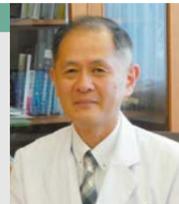
昨年3月には、国際医療福祉大学医学部の一期生が医師国家試験に臨み、全国2位の成績で合格しました。受験した海外留学生15人は、言語のハンディキャップをものともせず全員合格でした。22人の臨床研修医も入職し、うち12人(海外留学生3人を含む)は国際医療福祉大学出身でした。ぜひとも、栃木県北の医療の要となってくれることを期待しています。今年も多くの臨床研修医が入職すると思われますが、地域の医療の発展には潤沢な医師のマンパワーが必要です。サステナブルな医師の確保と養成が求められます。

本年も高度な医療と地域への貢献に努めてまいりますので、引き続き、何卒よろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学塩谷病院

病院長 須田 康文

慶應義塾大学卒、医学博士。慶應義塾大学病院整形外科副部長、国際医療福祉大学三田病院整形外科部長を歴任。日本整形外科学会認定整形外科専門医。



当院は、栃木県塩谷地区2市2町医療圏における基幹病院として、「地域の医療を支え、住民の健康をお守りする」という責務を担っております。

昨年5月、COVID-19の感染症法上の位置づけが5類となったから、一般社会は急スピードでコロナ前の状態に戻りつつあります。しかし、医療界においては、コロナ禍で生じた医療機関同士の連携の希薄化、患者様の受診控えの流れは、いまだ正常化には至っていません。昨年当院では、周辺の医療機関との連携をより深める目的で、従来の地域医療連携懇談会に加え、年2回の対面で行う地域医療連携研修会を新たに立ち上げました。また、一昨年より開始した骨折・骨粗鬆症リエゾンサービスの機能をより充実させ、引き続き高齢者の骨粗鬆症治療による再骨折の予防に取り組んでおります。一方、職場においては、職員間の親睦を深めるため、ワークライフバランス活動の一環としてソフトバレーボール大会を復活させました。

今年もこうした活動を通じて、「地域医療連携の充実と職員の一体感」を大切なテーマとして、27診療科29人の常勤医師を中心に、引き続き地域に根ざした中核病院として尽力してまいります。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学三田病院

病院長 山田 芳嗣

東京大学卒、医学博士。東京大学大学院麻酔科学教授、横浜市立大学医学部麻酔科学教授、日本麻酔科学会第61回学術集會会長、日本麻酔科学会副理事長を歴任。本学副学長。



第8波の感染拡大とともに始まった2023年は、医療も含めた社会体制全般が正常化に向かって大きく前進した1年でした。医療現場における影響は一番大きく、感染対策に対処しながら、コロナ禍で設けていた制約を解除し、従前より快適で良質の通常診療を復活しつつあります。東京都地域包括ケアシステムの枠組みの中で、重要なハブとして機能すべく地域連携や救急車の受け入れ、特に救急外来患者様の診療に対応するよう努力しています。

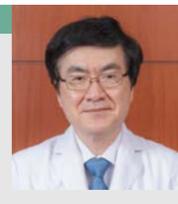
当院は高度急性期病院として、手術医療・救急医療の充実に継続的に取り組んでおり、救急車の受け入れは前年を上回る件数を達成し、心臓血管センター、脳神経外科、消化器センター、頭頸部腫瘍センター、婦人科、泌尿器科など、ロボット支援手術も含め高難度の手術を数多く実施しています。心臓カテーテルや消化管内視鏡などの内科救急も強化しております。

本年も、病院一丸となって一層努力してまいりますので、ご指導、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

山王病院

病院長 藤井 知行

東京大学卒、医学博士。日本学術会議第2部会員、前東京大学産婦人科主任教授、日本産科婦人科学会第4代理事長、国際医療福祉大学大学院・医学部教授、国際医療福祉大学グループ産婦人科統括教授。



当院は創立以来、患者様が安心してご利用いただける、思いやりに満ちたプライベートホスピタルとして歴史を重ねてまいりました。

わが国では新型コロナウイルス感染症が感染法上の2類から5類に指定変更され、対面でのイベント等の再開や旅行者の急増など、社会は流行前の日常を取り戻してきています。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行による病院受診者の減少はなかなか回復せず、どの病院も運営上の試練に耐え、立ち向かっています。私たち医療従事者は、患者様の健康回復と維持を第一に考え、その結果として患者様からの支持を得て、病院の運営を安定させる努力が求められています。当院では、診療科での対応がむずかしい場合に総合診療チームがフォローする医師チーム制を導入するなど、患者様本位の医療サービスをめざして病院機能のさらなる強化を図っています。

今年1年、どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉リハビリテーションセンター

センター長 下泉 秀夫

徳島大学卒、医学博士。元栃木県身体障害者医療福祉センター医務科長。国際医療福祉大学大学院教授。社会福祉法人邦友会理事。



当センターは、心身の障害や発達障害等の患者様への診療や療育および機能訓練を提供する「なす療育園」と、身体の障害に対する入所および日中活動サービスを提供する「サポートハウス那須」などで構成され、栃木地区における障害福祉サービスの中核を担う拠点です。

国際医療福祉大学熱海病院

病院長 池田 佳史

慶應義塾大学卒、医学博士。慶應義塾大学客員教授。日本消化器外科学会認定指導医・消化器外科専門医、日本外科学会認定指導医・外科専門医。



昨年5月にCOVID-19が感染症法の2類から5類に変更となりました。それに伴い、地域医療を支える当院としては、引き続きwithコロナとしての対策がむずかしい課題となった1年でしたが、コロナチームを中心に、職員一人ひとりの協力のおかげで取り組むことができたと思っております。改めて感謝申し上げます。

さて、2024年は「甲辰(きのえたつ)」です。「はじまりの年であり、芽吹きの年」「活気にあふれ、力がみなぎる年」といわれています。竜が水や雲、翼を得るように、職員一人ひとりが持てる力を存分に発揮し飛躍する1年になるよう、病院全体で支えてまいります。

静岡県東部、伊豆半島全域、神奈川県西部の医療を支える中核病院として、引き続き地域の皆様に安心して利用いただける病院をめざし、職員一丸となって進んでいきたいと考えております。

本年もご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

高木病院

病院長 筒井 裕之

九州大学卒、医学博士。九州大学名誉教授。前九州大学大学院循環器内科学教授。元北海道大学大学院循環器内科学教授、同大副病院長。第87回日本循環器学会学術集會会長、日本心不全学会前理事長を歴任。国際医療福祉大学副学長、医学部・大学院教授。



昨年も、地域の基幹病院として救急医療を担い、年間3,000件近くの救急患者を受け入れるとともに、506の病床では質の高い包括的な医療を安全に提供することができました。新型コロナウイルス感染症対策を継続しながら、着実に診療実績を達成した職員に心から感謝いたします。

当院は、大川や成田キャンパスの教育研修機関でもあり、多様な医療専門職の教育にも力を入れています。昨年は、指導体制をさらに強化し、本学第1期留学生6人を含む臨床研修医22人に充実した研修プログラムを提供できました。

福岡山王病院や福岡中央病院とも連携し、昨年以上に診療提供体制を充実させ、『皆様に信頼される病院、地域の先生方に信頼される病院、そして何よりも働く職員が信頼できる病院』をめざして取り組んでまいります。

本年もご指導、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

「なす療育園」病棟では、約半分の方が人工呼吸器管理や気管切開等を受けた超重症児者・準超重症児者にあたり、昨年は「障害者施設等入院基本料の七対一看護体制」を導入しました。職員が一丸となって安心できる医療や手厚い療育、機能訓練の充実に努め、大きな前進を遂げることができました。同じ大田原キャンパス内では、通所リハビリテーションを提供する「おたわらマロニエデイケアサービス」に介護保険の通所系サービスを集約するなどの再編も行い、2025年4月の成田老年医療福祉センターのオープンを見据え、引き続き邦友会施設の経営力や事業基盤の強化に努めていきたいと思っております。

本年も、ご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学成田病院

耳鼻咽喉科の市民公開講座を開催

2023年12月16日に、耳鼻咽喉科の市民公開講座を開催した。「健康長寿は耳から『きこえ』と健康・認知症の意外な関係」をテーマに、野口佳裕教授が「きこえ」と健康・認知症について、我那覇章教授が「きこえ」を取り戻そう～あたらしいきこえの治療～について、伊藤太枝子・言語聴覚士が「きこえ」とフレイルの関係について、それぞれ講演を行った。質疑応答では、集まった約160人の参加者から質問が

相次ぎ、事後のアンケートでも「大学病院ならではの最新治療をぜひ受けてみたい」「難聴は仕方ないと諦めている家族や知人に勧めたい」などの意見が多く寄せられた。

次回の市民公開講座は2月10日、「千葉県花粉症重症化ゼロ作戦」を開催予定。



●市民公開講座 会場の様子



●伊藤太枝子・言語聴覚士 ●我那覇章教授 ●野口佳裕教授(代表)

今年もイルミネーションがスタート

2023年12月12日、開院以来4回目となるイルミネーション点灯式を行った。地元企業によって北玄関前に設置されたオブジェは、敷地内をイルミネーションすることで当院のスタッフや患者様に楽しんでほしいという温かなご厚意によるもの。

点灯式には成田市の小泉一成市長・関根賢次副市長・うなりくんをはじめ、当院から吉野一郎病院長・看護部の酒井敬子副部長・祐川晃子副部長が参加し、カウントダウンで約3万球のイルミネーションが一斉に点灯した。点灯期間は1月31日まで。(広報室)



●イルミネーション点灯式

国際医療福祉大学三田病院/山王病院

「国際医療福祉大学三田病院・医療法人財団順和会 合同医療連携協議会」を開催

2023年11月27日、東京赤坂キャンパスにて「国際医療福祉大学三田病院・医療法人財団順和会 合同医療連携協議会」を開催した。新型コロナウイルス感染症の影響により、長らくこのようなイベントを見合わせていたが、2019年以降の開催となった。

当日は地域の72施設99人の医療機関の方をお迎えし、講演会と情報交換会を行った。

第一部の講演会では、国際医療福祉大学三田病院の合屋雅彦循環器内科部長より「医療連携で脳梗塞を防ぐ～カテーテルアブレーションと左心耳閉鎖術～」、山王病院副院長の大久保政雄消化器内科部長より「当院での内視鏡室の運用(検査および治療)」、山王病院の斉藤聡消化器内科部

長より「肝線維化、脂肪化の非侵襲的診断法について」と題し、それぞれの専門分野の取り組みについて報告した。

第二部の情報交換会は、本学の鈴木康裕学長の挨拶に続いて港区医師会の坪田淳会長よりご挨拶をいただき、さらに日本赤十字医療センターの中島淳院長の乾杯によって和やかに開始した。4年ぶりの開催ということもあり、各テーブルではさまざまな情報交換が活発に行われた。直接顔を合わせて交流することで、互いにより深い理解が生まれ、有意義で貴重な時間となった。

今後も、参加いただいた方をはじめとする地域の医療機関との連携を大切に、その期待に応えるべく、一層の努力を重ねていきたい。

(三田病院 総務課 山本悦子/山王病院 総務課 青島千恵)



●山王病院 大久保政雄副院長の講演



●左心耳閉鎖術について紹介する三田病院 合屋雅彦循環器内科部長



●情報交換会の様子



●情報交換会であいさつをする山王病院 藤井知行病院長

国際医療福祉大学病院

4年ぶりに「健康フェア2023」を開催

2023年11月3日、「健康フェア2023 ～健康のありがたさを実感しよう!～」が開催された。4年ぶりの健康フェア開催となったが、ミニセミナーや健康相談、各種体験イベントなどを展開し、多くの方に来場していただいた。

リハビリテーション室スタッフのAIによる姿勢計測、検査室スタッフの脂肪肝チェックなどは、参加者の関心も高く、予約枠がすぐに埋まる時間帯もあった。屋外テントでは、やきそばやけんちんうどん、芋煮などを廉価で販売。他にも、子どもの発達・医療介護・お薬の各相談コーナーや、バランスのよい食事の展示・説明コーナー、さらにピアノ演奏会など、小さなお子様から高齢の方まで「楽しみながら健康について学んでいただく」有意義な1日となった。

今後も地域に開かれた大学病院として、さまざまな取り組みをご提供していきたい。(総務課 中野雄斗)



●セミナーの様子



●栄養課による展示・説明コーナー

国際医療福祉大学熱海病院

クリスマスイベント「キャンドルサービス・コンサート」を開催

2023年12月22日、恒例のクリスマスイベント「キャンドルサービス・コンサート」を開催した。今回は、近隣の学校からキャンドルサービスに参加する学生を募り、当日は60人の看護学生がボランティアとして参加した。

各病棟で学生がキャンドルを灯し、クリスマスソングを歌いながら病室を訪れると、患者様の笑顔があふれ、病棟は和やかな雰囲気包まれた。

コンサートでは、小田原キャンパスの軽音楽部の演奏と歌のほか、佐藤哲夫名誉病院長と事務職員がピアノ演奏を披露した。最後に、会場内にいる患者様と職員全員で「We Wish You a Merry Christmas」と「ふるさと」を歌い、寒さのきびしい1日ではあったが心温まるひとときを過ごした。

患者様からは、「すてきな演奏でした」「楽しいひとときをありがとう」などのうれしいお言葉をいただいた。今後も、療養する患者様の心が安らぐ環境をつくれるよう努めていきたい。(人事課 伊藤銘子)



●キャンドルサービスに参加した看護学生の皆さん



●コンサートにて演奏を披露する小田原保健医療学部の軽音楽サークル

国際医療福祉大学市川病院

「神経難病患者様へのコミュニケーション支援研修会」を開催

2023年10月14日、前年に引き続き、神経難病支援に従事する医療・介護者を対象とした研修会を開催した。今回は「神経難病へのリハビリテーションの実践」をテーマに、21人の参加者があった。

最初に、当院の荻野美恵子神経難病センター長が神経難病患者様に対するリハビリテーションの重要性を力説、次に地域医療連携推進室の小林千恵子・医療ソーシャルワーカーによる公的支援制度の紹介、リハビリテーション室の大寺亜由美・作業療法士によるコミュニケーション機器とレンタル制度の紹介と続いた。最後に、参加者が実際に各種支援機器の操作を体験できる時間も設け、充実した内容となった。

参加者からは、「実際に意思伝達装置や文字盤に触れる機会がなかったので、大変勉強になった」など多くの好評のコメントをいただいた。

今後も地域の支援者が抱えている問題や支援手段を取り上げ、研修会を継続していきたい。

(総務人事課 高田聡)



●講演をする荻野美恵子神経難病センター長

国際医療福祉大学塩谷病院

「よりよい職場環境づくりのための発表会」を開催

ワークライフバランス推進会議は、働きやすい職場環境づくりを進めようと2023年12月8日、院内の取り組みを紹介する発表会を開催した。6月に実施した勤務環境アンケート結果をもとに、7部署から課題解決に向けて取り組んでいる様子が発表された。どの部署も業務の効率化をめざし、OJT・勉強会や研修会を通しての資質の向上やフォロー体制の強化に取り組んでいること、時間外の削減や休暇のとりやすい職場環境づくりに成果を上げていることなどを披露した。

村上充子看護部長より総評として、「医療環境の変化により改善されない部分もあるが、「継続は力なり」で、どんな小さなことでも改善していこうという意識と、自部署の問題を公表することにより風通しのよい職場にしようという意識が組織力につながる。次年度も目標を持って改善しよう」と職員を激励し締めくくった。

(総務・人事課 後藤文栄)



●発表内容に熱心に耳を傾ける参加者

第12回「共に生きる社会」めざして 高校生作文コンテスト表彰式開催



第12回「共に生きる社会」めざして 高校生作文コンテスト(主催・国際医療福祉大学、毎日新聞社、後援・文部科学省、全国高等学校校長協会)の表彰式が11月26日、東京赤坂キャンパスの講堂で開かれた。

1997点の応募作品から選ばれた作品を表彰

応募1997点を厳正に審査した結果、最優秀賞に、神奈川県・相洋高等学校3年の河野愛美さんの「差別の境界線」が輝いた。

優秀賞には、千葉県・筑波大学附属聴覚特別支援学校3年の館野泰治さんの「見えない心の繋がり」が、佳作には山形県立米沢興譲館高等学校1年の藤村愛依さんの「働く人の多様性」と、福岡県立八女高等学校3年の田中花さんの「一人じゃないよ」が選ばれ、審査委員長の鈴木康裕・国際医療福祉大学学長から表彰状や楯などが贈られた。個人賞では、このほかに入選4人が選出されている。団体での応募数や入賞者数などを基にした学校賞は、埼玉県・本庄東高等学校、東京都立清瀬高等学校、神奈川県・相洋高等学校、静岡県・静岡雙葉高等学校の4校に授与された。

開会の挨拶で鈴木学長は「本学は建学の精神に『共に生きる社会』の実現」を掲げている。作文を通じて知る皆さんも、試行錯誤を繰り返しながら、同じ目標に向かう同志のように思えてならない。今回の受賞を契機に、さら

なる飛躍を遂げることを心より願っています」と祝意を述べた。

「真摯なまなざしが見てとれる作品ばかりだった」毎日新聞社・元村論説委員

今回のコンテストは、「医療と福祉、わたしの体験」「誰かのために、私ができること」「多様性を認め合う社会をめざして」の3つをテーマに作品を募集した。

審査委員を代表して、毎日新聞社の元村有希子論説委員は「体験したことを深く掘り下げ、自分なりに考え続けて社会への提言に結び付けていく力量は本当に素晴らしい。共に生きる人々への温かなまなざし、困っている人、苦しんでいる人に自分は何ができるだろうという真摯なまなざしが見てとれる作品ばかりだった」と講評をした。そのうえで「近くの人を幸せにしたいという姿勢を大切に、自分らしさを伸ばして、機会があれば医療や福祉の仕事に就いて、社会に貢献できる大人になってほしい」と語りかけた。

受賞を記念して、出席した受賞者4人による作品の朗読も行われた。自らの体験や思いがつけられた内容に、会場で見守っていた東京赤坂キャンパスの赤坂心理・医療福祉マネジメント学部の学生らから、温かい拍手が送られた。

閉会にあたって本学大学院の福井トシ子副大学院長が登壇し、「受賞した皆さんが作品を朗読するのを見て、『共に生きる社会』はつくれると確信しました。このような経験を自分のこれからの人生に生かしてほしい」と激励した。

令和5年度 学位記授与式・卒業式 / 令和6年度 入学式

	令和5年度 学位記授与式・卒業式	令和6年度 入学式
大田原キャンパス	令和6年3月11日(月) 11:00~ 大田原キャンパス 那須アスリーナ(体育館)	令和6年4月4日(木) 11:00~ 大田原キャンパス 那須アスリーナ(体育館)
成田キャンパス	令和6年3月9日(土) 11:00~ 国際医療福祉大学成田病院 成田国際ホール	令和6年4月6日(土) 11:00~ 国際医療福祉大学成田病院 成田国際ホール
東京赤坂キャンパス	令和6年3月8日(金) 15:30~ 東京赤坂キャンパス 講堂	令和6年4月5日(金) 15:30~ 東京赤坂キャンパス 講堂
小田原キャンパス	令和6年3月8日(金) 10:20~ 小田原キャンパス 本校舎 講堂	令和6年4月5日(金) 10:20~ 小田原キャンパス 城内校舎 体育館
大川キャンパス	令和6年3月6日(水) 13:00~ 大川キャンパス 講堂	令和6年4月3日(水) 11:00~ 大川キャンパス 講堂
塩谷看護専門学校	令和6年3月5日(火) 10:00~ 塩谷看護専門学校 講堂	令和6年4月8日(日) 10:00~ 塩谷看護専門学校 講堂

International University of Health and Welfare IUHW CONTENTS vol.136 January 2024

2~3 **特集1 新春のごあいさつ** 高木邦格理事長 / 鈴木康裕学長 / 矢富裕大学院長

4~5 **特集2 ~東京赤坂キャンパスでつなぐ国際交流の輪~ 「国際の集い」開催**

6~7 **トピックス1** 令和6年能登半島地震被災地へDMAT派遣 / トルコ地震特別救助隊派遣でJICAから感謝状 / 医療福祉・マネジメント学科教員が大田原高校生の研究発表に助言 / 今中助手の研究論文 協会史の学術奨励賞を受賞 / 2023年度後期 防災訓練

8~9 **キャンパスレポート** 国道461号がラベンダーロードに(大田原キャンパス) / 「第20回学生&企業研究発表会」薬学部学生 金賞受賞(大田原キャンパス) / 2023年度 国際医療福祉大学 合同慰霊祭及びご遺骨返還式(成田キャンパス) / 第18回運動会を開催(小田原キャンパス) / 高校生対象に薬学プレミウムカレッジを開催(大川キャンパス) / 4年生による就活体験会を実施(東京赤坂キャンパス)

10~11 **施設インフォメーション** 各病院長・施設長の新春のごあいさつ

12~13 **施設インフォメーション** 国際医療福祉大学成田病院 / 国際医療福祉大学病院 / 国際医療福祉大学熱海病院 / 国際医療福祉大学三田病院 / 山王病院 / 国際医療福祉大学市川病院 / 国際医療福祉大学塩谷病院

14 **トピックス2** 第12回「共に生きる社会」めざして 高校生作文コンテスト表彰式開催

15 令和5年度 学位記授与式・卒業式 / 令和6年度 入学式の予定

16 **キャンパスプラス1 クラブ・サークル紹介** ドッジボールサークル(小田原キャンパス)

小田原キャンパス編

ドッジボールサークル

こんにちは!ドッジボールサークル長の板垣芽生です。私は2023年6月、高校の部活動をともにした友人と、その友人の3人でこのサークルを立ち上げました。中高6年間のソフトボール部で、運動を通して友人と仲良くなったり、ストレスを発散させたりしてきました。大学でも何かしたいと考えていて、サークルの話をしてたとき誰かが発した「ドッジボールやりたくない?」という一言からこのサークルが誕生しました。今では、「みんなが楽しめるような場をつくりたい」「たくさんの人とかかわって仲良くなりしたい」という思いで活動しています。最近では部員が10人ほど増え、2年生の先輩も加わりました。

ドッジボールは誰でも親しみやすい競技だと思います。現にメンバーの高校時代の部活動は、サッカー部、バスケ部、卓球部、テニス部、バレーボール部、ハンドボール部、ダンス部、帰宅部などさまざまです。経験してきた部活動はちがっても、ドッジボールのプレー中にボールを当てた時や取った時、ともに喜び合い仲良くなれます。また、ドッジボールには、一人ひとりが個性を生かして活躍でき、誰でもヒーローになれる競技であるという魅力もあります! 早いボールが投げられる、キャッチができる、避けるのが上手など、各々の個性を光らせてプレーすることができます。このように、活躍の形は色とりどりで、誰もが主人公になれます!



●メンバーみんなでドッジボールの“D”!

活動中は運動会の延長戦のように楽しんでいます。ルールはいたってゆるゆるなので、みんなが確実に楽しめます!! 当日にチーム分けをし、何回もメンバーを変えて試合を行うことで、たくさんの人とかかわることができます。現在、毎週木曜日18時から20時まで小田原キャンパス城内校舎にて活動しています。メンバーは男子が10人ほど、女子が20人ほどで、学科では理学療法学科の割合が高く、ほとんどが1年生ですが、学科や学年を問わずもちろん大歓迎です!! ストレス発散や気分転換にでもぜひ遊びに来てください。サークルメンバー一同お待ちしております!

少しでも気に入ってもらえたらサークル長まで連絡してください!

小田原キャンパス ドッジボールサークル代表
看護学科1年 板垣芽生



●ジャンプボールからゲームが始まります



●城内校舎体育館で和気あいあいと楽しむメンバー